

第215回くらしの植物苑観察会 2017年2月25日(土)

- 新春の植物 -

辻 誠一郎(東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授)

新春の植物といえば、松、竹、梅、すなわち「松竹梅」を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。正月のお祝いには必ず登場するからです。松と竹は門松として一体化しており、いずれも神が天上から降臨するのに欠かせないものと説かれてきました。松も竹も正月に花を咲かせないので、その姿かたち、正月でも力強く青々としていることが新春の植物の地位を獲得したといっても過言ではないでしょう。梅はどうしてなのでしょう。春一番に花を咲かせるからでしょうか。花を咲かせるとは、実りを保証するからかも知れません。要するに、年の初めにあたって、今年もよい年であるように、神にお願いし、自身も実り多い年であるようにと祈る気持ちをこれらの植物に託しているのでしょう。

習俗とは、なぜそうなのかがわからないことが多いものです。そうであればこそ、長い歴史をもっているものなのかも知れません。自身が作り出したものでなく、先祖が作り出したものでもない、遠い昔に、気が遠くなるような時間をかけて作り上げられたものだからでしょう。新春ということばは、新しい年の始まりを意味しています。この年を健康で、実り多い年であってほしいとの願いを新春の植物に託してきたのでしょう。そういう気持ち・願いが託されてきた植物を、このくらしの植物苑で見つけてみましょう。

いつのころから定かではありませんが、年の初めに一番早く花を咲かせるのは蠟梅(ろうばい)だと言われてきました。蠟梅は中国から海をわたってきた植物とされるので、古くに日本にもたらされたものでしょう。考えられるのは、鎌倉時代から室町時代にかけてです。最近では、各地に蠟梅の名所が作り出されています。群馬県の板倉町にある雷電神社でも見たことがあります。空っ風が吹きすさぶ正月に、鮮やかな黄金色の花だけを満々とつけた蠟梅は、いかにもこの年の豊作を保証するかのようでした。

蠟梅は古くに日本にわたってきたと考えられるのに、ブームになったのはごく最近のような気がします。それに比べると圧倒的に人気があり、習俗にも定着しているのが、梅・桃・桜であることは間違いありません。

2月25日は菅原道真の命日です。道真は梅をこよなく愛したと言われていますが、こよなく愛していたかどうかは定かではありません。後世の信心ぶかい人々が作り上げた可能性もあります。平安時代の人だけに、たくさんの伝説が作り上げられて、道真と梅は切っても切れない縁となってしまいました。これには中国仏教である禅の普及や天神信仰が深くかかわっていると見ていいでしょう。

梅は日本国号を掲げて日本国家がスタートしたころに、国家の基礎となる律令制の導入とともに中国からもたらされたさまざまな中国文化の一つであったと考えられます。大宰府では梅を愛でる宴会が催されたことを万葉集から知ることができます。観梅文化は舶来のものであり、限られた上流貴族に囲われたものであったのでしょう。鎌倉時代以降に、中央集権が和らぎ、権力が地方に分散される過程で、貴族文化が一般市民に広がるようになってから、梅は急速に普及していったと考えられます。そうはいつでも、囲われた世界である庭あるいは梅園で愛でることは、今日まで変わらなかったといえるでしょう。

桃が日本にもたらされたのは梅より千年も古いのです。というのは、弥生時代の遺跡から大量の桃の果実が出土しているからです。果実といっても、桃を食べた後に残るあの固い部分です。タネと言われていますが、果実の皮のいちばん内側の内果皮といわれる部分です。中国では、桃は鬼に勝つ木と信じられていたようです。また、妊娠時のつわりに効くとされていました。古代までに花桃が日本にもたらされ、3月の上巳の日を桃の節句として祝うようになったと考えられています。女の子が健やかに育ち、子供に恵まれるようにとの願いを桃に託したのでしょう。

日本の花といえば、それは桜です。梅や桃が海をわたって日本にもたらされたのに対して、桜はもともと日本の野山にあったものです。たくさんの品種が見いだされ、また、八重桜のような突然変異体ができしたのは、古くから人が桜に深くかかわってきたからでしょう。おそらく、桜を伐採せずに残し、また、植えていったことが、複数の種の交雑を促したのではなかったかと考えられるのです。あまたの八重桜の品種群は、おしべ、めしべが花弁となって、子供を作ることができなくなっています。そのため、一代だけで絶えざるをえないのです。それを絶やさないために、接ぎ木をするなどの工夫がなされてきました。

桜は稲の神の依り代と考えられてきました。少なくとも日本の国号を掲げた古代日本においては、桜は神の依り代であり、先祖の霊の依り代であったと考えられます。桜の開花は、たわわに実った稲穂を意味し、秋の豊作の願いが託されたと考えられます。

蠟梅も、梅も、桃も、そして桜も、ほとんどすべてが花だけの開花から始まるのには大きな意味がありそうです。新春の花々には共通するところがありそうです。



次回予告 第216回くらしの植物苑観察会 2017年3月25日(土)
 「草木染めの歴史と科学」(小瀬戸 恵美 当館研究部情報資料研究系)
 13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合申込不要